

子どもたちが自ら学習計画を立て、時間配分を考えて学びを進めていく。東小学校の「子どもに委ねる学び」の成果



つくば市では、「一人ひとりが幸せな人生を送ること」を最上位の目標としたつくば市教育大綱を2020年に策定し、「教えから学びへ」「管理から自己決定へ」「認知能力偏重から非認知能力の再認識へ」という理念のもと教育改革を進めています。

もしかすると、市民のみなさんの中には、「これまでと何が変わったの?」「具体的にどんな授業を行なっているの?」と疑問に思っている方もいらっしゃるかもしれません。そこで、つくば市の学びに関わる人たちにインタビューをして、改革の一端をお伝えしていくことにしました。

この記事では、子どもたちに自分で学習計画を立て主体的に学んでもらう「単元内自由進度学習」を取り入れた国語の授業を紹介します。洞峰学園つくば市立東小学校4年1組担任の本吉広武先生、つくば市教育委員会指導主事の宮内周也先生にお話を伺いました。

授業の中で子どもたちが「自己調整」をできるようになるために



左が宮内先生、右が本吉先生

——まずは、授業の概要について教えてください。

宮内先生:つくば市教育委員会では令和6年度から「つくばの学び推進訪問」という取組を始めました。教員同士で新しい形の授業を練り上げていただき、指導主事も伴走しながら、その授業を通して得られた学びを校内に広げていくというものです。令和6年度は「単元内自由進度学習に挑戦してほしい」と各学校に要望しました。

本吉先生:当校では、4年生の先生たちでチームを組んで、国語の「山場のある物語をつくる」という単元で単元内自由進度学習を取り入れることにしました。単元全体の時間は9時間です。通常の授業では、教師が「今日はこれをやるよ、明日はこれをやるよ」と進めていくのですが、今回は子どもたちに「自分が物語をつくるためには何が必要か」を考え、自分で学習計画書を作成して取り組んでもらいました。それには子どもたちが自分ごととして取り組みたくなる工夫が必要だと考え、「成果物を学校のみんに読んでもらう」ステップを単元内に追加しました。

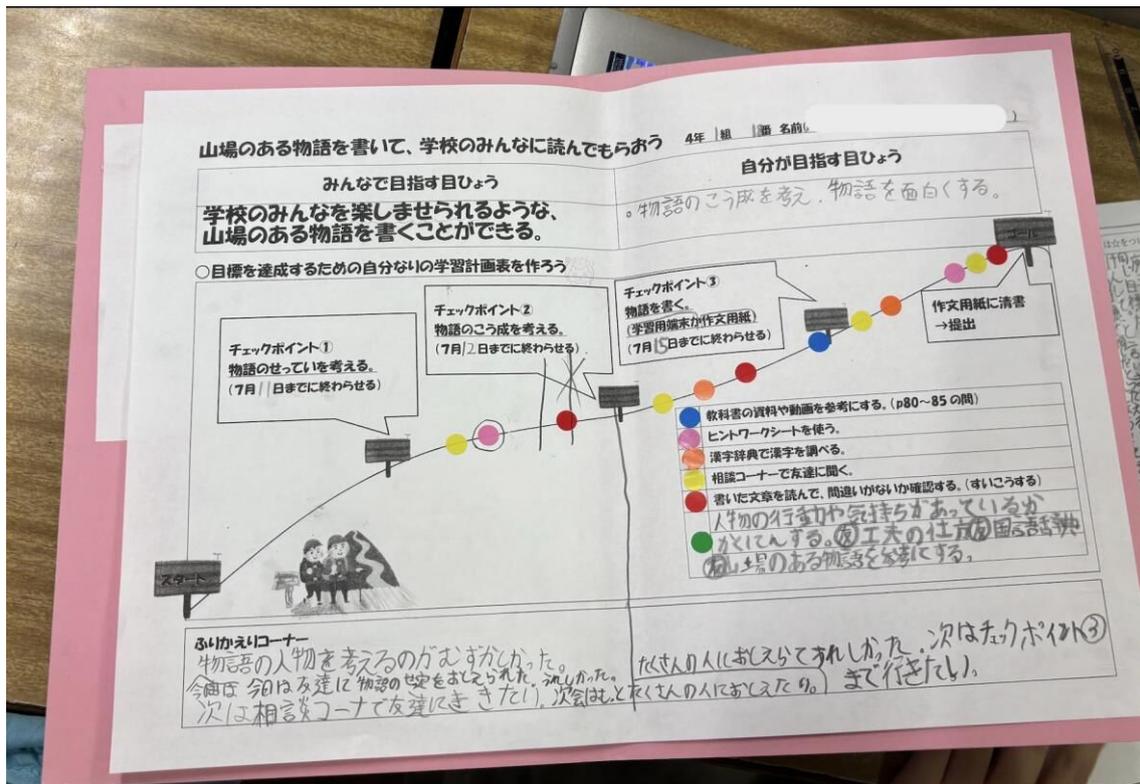


図書室に「物語コーナー」を設け、作品を展示。展示方法や装飾も子どもたちが考えました

——単元内自由進度学習に挑戦するにあたり、懸念点はありましたか？

本吉先生：「誰がいま何を行なっているのか」を教師がどう把握するかがひとつの課題でした。そこで活用したのがパドレットという情報共有アプリです。「物語の設定を考える」「物語の構成を考える」「物語を書く」「清書する」といったチェックポイントを設定し、子どもたちに自分で進捗状況を入力してもらいました。チェックポイントに到達したら持ってきてもらうことにしていたので要所要所で学習の評価ができましたし、つまづいている子のサポートにも入りやすかったです。

また、子どもたちも自分や周囲の状況を把握できるので、「遅れているからスピードアップしよう」「先に進んでいる子に相談してみよう」と自ら考えて行動していました。ゴールから逆算して物事を計画する力がついたのではないかと思います。



宮内先生: 学習計画書の作成を通して、子どもたちが授業の目的と進め方を把握できたことも大きかったと思います。「自分は清書に時間がかかるから早めに構成を考えないと」「後からやり直すと大変だから設定に時間をかけよう」といった具合に、自分自身の得意不得意を踏まえた上で時間配分を調整していましたね。今回の単元を通して、メタ認知力と自己調整力が鍛えられたのではないのでしょうか。

本吉先生: そういったねらいもあり、今回は1時間ごとに「この時間はここまで進んだから次はこれをしたい」と現状の振り返りと次回の計画を書いてもらいました。

宮内先生: つくば市教育大綱で示した指針のひとつに、「管理から自己決定へ」というものがあります。目的のためにどんな方法で取り組むか自分で決定する。やってみてうまくいかなかったら、どう改善するかまた自分で決定する。本吉先生は、そういった自己決定を繰り返すサイクルをうまく授業に取り入れてくださったと思っています。

「相談コーナー」で子ども同士が対話し、学びを助け合う

——そのほかに工夫した点はありますか？

本吉先生：教室内に相談コーナーを設置しました。うまくいかないときは相談コーナーに行くと、同じところで詰まっている子がいて、一緒に考えることができるんです。さきほど「つまづいている子のサポート」と言いましたが、私が何かアドバイスをするのではなく、「相談コーナーに行ってください」と促し、子どもたち同士の対話によって解決するように仕向けました。

宮内先生：「物語の展開を考えるコーナー」「登場人物について相談するコーナー」と細分化されていたので、子どもたちが何を目的にそこへ行くかが明快でした。目的が不明瞭だと無駄話が発生しがちですが、相談コーナーでは子どもたちがお互いに話を聞き合っていました。

でも、それができたのは、本吉先生が培ってきたクラスの雰囲気も大きいと思います。「話しても馬鹿にされたりしない」という信頼があるから、子どもは自分が悩んでいることをクラスメイトに打ち明けることができたし、相談された方も相手の話をしっかり聞いて親身になって考えることができたのではないのでしょうか。



本吉先生:1組の学級目標を子どもたちと「周りをよく見て助け合いができるクラス」と決めて、いつも「いま助け合いができているかな」と問いかけるようにしていたので、それが功を奏したのかもしれない。今回、早く終わった子たちには、「アドバイザーになる」「もう一つ物語をつくる」という2つの選択肢を提示したのですが、多くの子が前者を選択し、率先して友達の手助けをしていました。人のサポートをすることも、子どもたちにとってよい学びになったのではないかと思います。

「この授業で自分にどんな能力が身につくのか」を把握して学ぶ

——これまで行なってきた授業と比べて、何か変化はありましたか？

本吉先生:「山場のある物語をつくる」という単元はこれまでも担当してきましたが、**今年は子どもたちの顔が本当にいきいきしていました。授業が終わった後も熱中して取り組んでいたほどです。授業の目的と子どもたちのモチベーションが一致すると、こんなに変わるんだと私自身驚きました。**



宮内先生:授業づくりの段階で、先生たちはみんな「この授業は楽しくなりそうだ」「自分もこの授業を受けたい」とおっしゃっていましたよね。やっぱり、先生が楽しみながら授業をつくと、子どもたちにとっても楽しい授業になるんです。

今回はとくに、先生同士で「どうすれば子どもたちの能力が伸びるだろう、学習意欲を引き出せるだろう」と対話しながら力を合わせて授業をつくっていただきました。先生自身が対話と自己決定を行なっているから、子どもたちも対話と自己決定を学べたのでしょう。先生と子どもの学びは相似形なのだと改めて感じました。

本吉先生:たしかに、ほかの先生と一緒に授業をつくることで自分にはなかった視点やアイデアを取り入れられたし、学びが大きかったです。



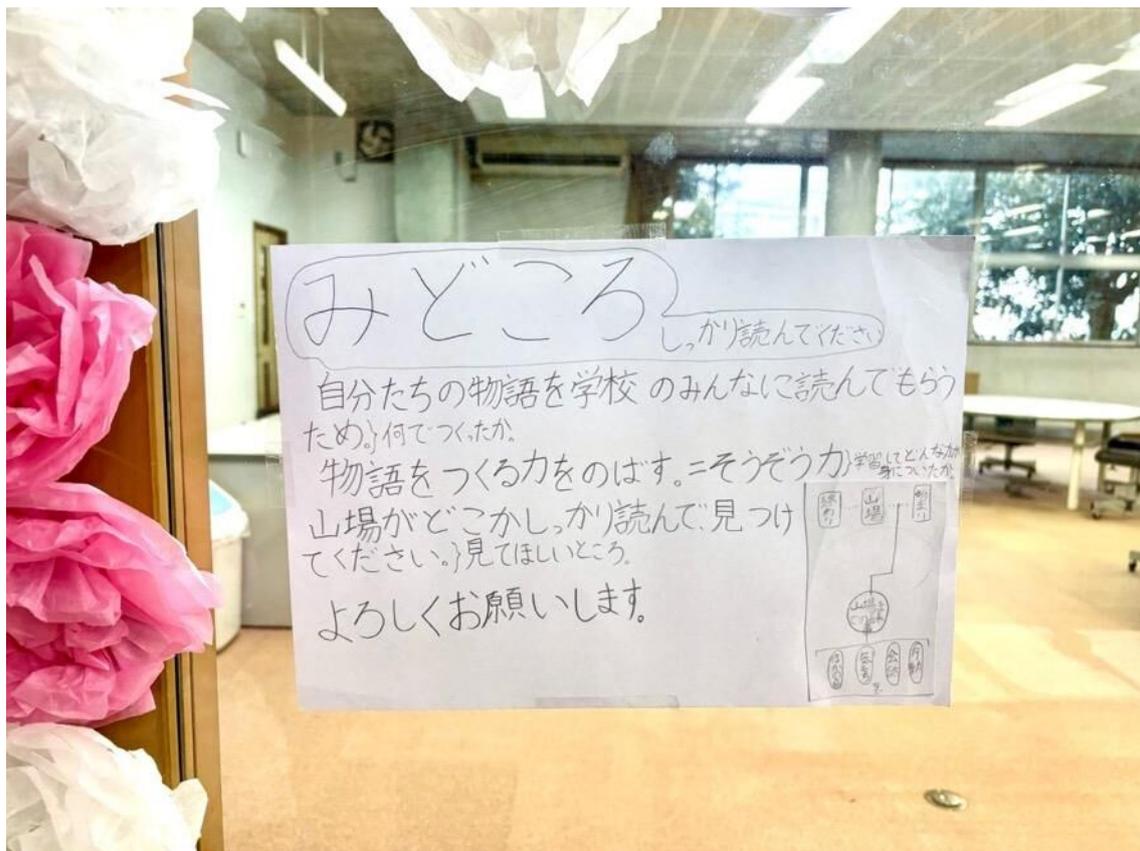
——子どもたちの国語力も伸びましたか？

宮内先生:子どもたちは成果物の展示場所に、「なんで(物語を)つくったか。物語をつくる力=そうぞう力を伸ばす」と書いて掲示していましたね。自分たちが何のために授業に取り組むのか、授業を通してどんな力を身につけるのかをしっかりと把握して取り組んだということです。これはとても大事なことです。

国語の授業には「人物像を読み取る」「情景描写によって表されている心情を読み取る」などさまざまな目的があるのですが、子どもたちはただ「ごんぎつねを勉強した」「スイミーを勉強した」と思っていることが多い。そうすると、学びを自分のものにしづらいのです。

今回の単元の場合、学習指導要領には「相手や目的を意識して、経験したことや想像したことから書くことを選び、伝えたいことを明確にする」「書く内容の中心を明確にし、内容のまとまる段落をつくったり、段落相互の関係を抽出して文章の構成を考える」などの目的が書かれています。本吉先生はそれをわかりやすい言葉で子どもたちに共有していたので、子どもたちは自分の学びに自覚的に取り組めたのではないかと思います。

本吉先生：この単元以降、子どもたちは何かを行うときに「なぜそれをやるのか」とまず目的を考えて計画を立てていましたし、学級会を進行する上でも「誰々さんの意見はとてもいいけど、今回の目的を考えると別の方法がいいと思う」と、相手を意識した発言ができるようになりました。いろんな場面で、今回身につけた考え方のベースが活着いていると感じています。



幸せな人生を送るために必要な非認知能力を伸ばしたい

——教育大綱では「一人ひとりが幸せな人生を送ること」を最上位の目標としています。今回の授業で学んだことも、幸せな人生を送ることにつながると思いますか？

本吉先生: 幸せの定義は 1 人ひとり異なりますよね。自分にとっての幸せが何かを定義して追求していくときには、やはり非認知能力が必要になると思います。自分と向き合う力、自分を受容する力、自分を高める力、他者と協力する力。数値で測ることのできない、人の心や社会性に関係する力ですね。授業を通して、そうした能力を伸ばすことができたのではないかと思います。

宮内先生: 人と対話する際は、自分とは異なる意見に対しても「なんでそう考えるのかな」と想像し、一旦相手を受け入れて、「そうなんだ、私はこう思うんだけどどうかな」と問いかけられることが重要です。本吉先生はそうした対話の機会を上手につくってくださったと思っています。



本吉先生: 今回つくば市で実施した「幸せな学校づくりアンケート」で、東小の 4 年生は「自分とは違う考えや気持ちを否定しないで聞くことができる」という項目が平均よりだいぶ上回っていました。自己調整力の項目も高かったですね。

宮内先生:素晴らしいですね。今回、自分で計画して自分で振り返り調整した経験というのはとても大きいものだと思います。「自分はここが弱いんだ」「だからこうしていこう」と自分で考える。そこに教師がフィードバックをして後押しすることで、子どもたちは安心して進んでいくことができる。「自分はこれでいいんだ」と思える場面がたくさん生まれたのではないのでしょうか。

学びは何度も繰り返すことで自分のものになります。今回の学びをほかの教科の授業にどう波及させていくかを意識しながら、今後も子どもたちが夢中になれる授業づくりに取り組んでいただけると幸いです。



■つくば市教育大綱

https://www.city.tsukuba.lg.jp/material/files/group/7/kai_kyouikutaikou.pdf

(企画／つくば市教育局学び推進課、一般社団法人 HatchEdu 執筆・撮影／飛田恵美子)